

第 38 回大会 若手研究交流会に関する報告

今回のテーマは「悩める若手研究者はどのようなネットワークのもとでキャリアを形成してきたか—ともに歩む仲間の獲得に向けて—」で、6月17日(土)12:00~13:00に開催され約30名(スタッフ、パネリスト含む)が参加しました。全体の構成としては、まず、過去2回開催された若手研究交流会の講演者である4名のパネリスト(黄美蘭 会員(首都大学東京国際センター)・近田由紀子会員(文部科学省国際教育課)・南浦涼介会員(東京学芸大学)・小松翠 会員(お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所))から、自身のネットワーク構築や若手研究交流会での登壇後の自身の状況や課題、若手交流会を通じた変化等に関する報告がありました。その後、菊池哲佳 会員(仙台観光国際協会)が4名のパネリストの報告を受けコメントを行い、質疑応答があり、最後に野山会員が総括を行いました。

黄会員の講演では、出身ゼミや元指導教官、現在の職場での間の既存のネットワークに加え、若手交流会を通して興味・関心が同じ方向に向いている仲間を獲得できたこと、悩んでいるのは自分一人ではないことに気づき、少し前向きになれたことなどが報告されました。近田会員からは、小学校教員としての教育実践から広がったネットワークを活かし、現在は新たな実践研究へと取り組んでいること、若手交流会を通し、自身の課題が鮮明になり、身近なところで語り合い励まし合える仲間を獲得できたこと、今後の展望に対し意識が高まったことなどが報告されました。南浦会員からは、前年度の若手交流会での登壇後の2016年は自身にとって「移動」の年であり、地域・職場・教育・研究分野・家族構成など、様々な移動を通し、目的や戦略、教育内容の更新や研究テーマ・研究フィールドの再立ち上げを行った年であったことなどが報告されました。小松会員からは若手交流会での登壇により、自身のネットワークを振り返ることで、日頃、自身を支え理解してくれている周囲の人々や環境への気持ちが高まったこと、若手交流委員としての活動により、様々な会員とコミュニケーションをとることができたが、今後は更に交流を積極的に行っていきたいと考えていることなどが報告されました。パネリストの報告を受け、菊池会員からは、自身の実践やキャリアにとっても学会を通し、研究課題について学び、会員間でネットワークを構築していくことが重要であったこと、今後も若手研究者の間での交流活動が継続していくことの重要性などが語られました。参加者へのアンケートでは、「これからも楽しい企画をしてほしい」「皆さんの話を聞き、とても共感できる場所も多く、がんばろうと思わせてもらえました」など今後も定期的に交流会が開催されることへの期待や自身がエンパワーメントされたことに関する意見が多く見られました。

また、今回の若手交流会では、学会懇親会後、仙台市の某居酒屋にて、自由参加の若手交流会の懇親会を実施しました。当日の急な呼びかけにもかかわらず、若手交流委員、参加者、パネリストの約20名が参加しました。参加者が自由な雰囲気これまでの自身の歩み、現在の課題、将来の展望などについて熱く語り合う場となりました。今回は新たな若手交流委員会に引き継ぐ前の最後の若手研究交流会でしたが、パネルディスカッションを通し、委員会としての総括もでき、若手交流会の懇親会ではより親密に話ができる若手研究者同士のネットワーク構築の機会も提供できたと思います。

◆若手交流委員会◆

- ・野山 広 (国立国語研究所)
- ・小松 翠 (お茶の水女子大学)
- ・南浦 涼介 (東京学芸大学)
- ・文 吉英 (東京福祉大学)